

後
二

今
回
中
心
の
手
帳

5
1499
2



門 判
 1499
 卷 2 止



俳諧今四家發句集秋之部目錄

秋の	十六次	為	菱柳	木權	盆	初秋
まの	秋の日	ハ	桐	胡白	日	七夕
葉	秋日和	胡	花	花	種	鬼系
月	秋の	秋	花	女郎花	心	迎火
木	秋の	秋	花	花	心	接骨
案	秋の	目	花	花	花	踊

誰うも秋来る乃いあるく紫
くぬを貝らゆるを新こそこも枝
紫中らあのかくしとらさる種の名

万和

七クメ

槐一もふくけくやまより色すし

蒼虬

か後川の上より朝乃ての川

草ささるてましとまのあはれ
あかりをまゆり夜に天乃川

雪櫃
木海

七夕や昨日ふ雪る 川の縁

魂祭

柳粟のこも葉らるる

雪櫃

近大

玉中の流しはくた自夜う家

接待

接待にやとけのく佛

さしり

松風のくく枝織るもくり

さしり
くく
くく
くく

淡粧のくく声あつるくり

盆

常とるまゆりくく山あふ

あつるまゆりくく色め

行止のまゆりくく月

本海
雪櫃
万和

目く

日くらししやよて新ひ乃そ木
日くらしの鳴くすく暮の水
木海

秋 蟬

秋の蟬鳴くし都をらそ木なる
懐にうんとそより秋乃蟬
雪海

む

喘かた夜よそ木よりそ木声
むのや大名世とけくし海雪
蒼虬

後接し給ふやあくやきりふ
新燈にあひききあてたきりあ
蒼虬

火あ新いあうたけあきりあ
たきりくすあやああああああ
木海

桐

端の斧とくたあふ一ああ武
桐のあふの二口ふ二ああああ
雪海

木 槿

中くくあああああああああ
祖又はあああああああああ
雪海

一里目とあああああああああ
えあああああああああああ
雪海

此れうのてゑの是る 木槿うら
情をうら小煙も木槿を木槿

報鳥

報鳥にまぬの秋をさく李 蒼虬

報鳥やそ詠の世をむら秋

報鳥に縁の白ひはうう秋

くう報う海人の報鳥なうう李 雪

報鳥のうう秋をさく李 雪

報鳥乃ばあうやうすもさうの

報鳥や夜うう秋をさく李

報鳥や夜うう秋をさく李

報鳥のうう秋をさく李 稲の風

報鳥のうう秋をさく李 木

報鳥のうう秋をさく李 木

報鳥のうう秋をさく李 万和

報鳥のうう秋をさく李 万和

報鳥のうう秋をさく李 万和

萩

報鳥のうう秋をさく李 蒼虬

報鳥のうう秋をさく李 蒼虬

報鳥のうう秋をさく李 雪

報鳥のうう秋をさく李 雪

こふ嘆く一ふり新ぬ花の雪
折てけり秋よもけりや文あると
破る紙乃森くぬけり居る相
かハ少花よりの古しきまえて通
酒もあも山くく汲て花の香
ゆり世の人も住之み花のねく
下葉より花のけり花の垣ぬが
朝一や花も水も花の中

女帝花

夕く花のやを捨てて雪も
ゆきもいこいけり雪と来り
山の尾よりこれふそく木も花
、 蒼 虫
、 雪 旋
、 万 和
、 木 海

おきくくおきくく又おきく
水もをきくむのすくれて女も
おきくくおきくおきくおきく
、 万 和
、 蒼 虫

あきくくく山風くたきく
きくのの少きく少きく唐かし
、 蒼 虫
、 木 海

つね合に花のけりいせきや花の
おにきく又の窓をえをねむく
、 木 海

まきくくく雪も風くあきく
、 雪 旋

稲雀

夜は静か寝てたもう 船は光 雪 旋

すゝ葉

蒼 虬

いすまゝしぬまゝいふれむき

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

はくまやうり別後の何のきり

ふ伏の煙いしきききききき

戸口いゝ飯あめあめあめあめ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

尾花をさすききききききき

勢の月のとくききききききき

木 海

うたゝのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

霧

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

きりぎりすのうらみあはれすまゝ

万 和

木 海

蒼 虬

穉き身よりけしきのみ級 依るる程
穉くしやなまなりなりとつゆふ
穉き身の日をたるとか 蟻
穉くしや鯛の身は白きを割る
木 海

娘 風

信んと鯉のすゝこや秋の風
夕涼しく人かき舞うてあふは風
人形ふつとくまはや秋の身を
病みの風をくまは秋のうら
山黄や道とく先乃秋のうら
秋の身は少なき身は池の底
秋の身はや小山をくまは秋の身

を過ぐりては秋の身は三井の身
秋の身はくまは秋の身は
蟻よるにくまは秋の身は
蒼き身をくまは秋の身は
ちけくまは秋の身は
まをりては秋の身は

あ

人信てかくは秋の身は
大寺の秋の身は
そくは秋の身は
細細の秋の身は
そのの秋の身は

蒼 虬

木 海

木 海

雪の夜にさかふよのし煙まはた
と川をりやあふりさき小まら
草木をまきや鳴らさくやあふり

雪 旌

朝

八影やまよふやうきりし鳴雀

木 満

朝の目先しほやめおけり

宿の松をけりてのよき夜をそ也

朝の如く川をさきりきりて

雪 旌

雪

宿の松をけりてのよき夜をそ也

木 満

夜

宿の松をけりてのよき夜をそ也

蒼 虬

宿の松をけりてのよき夜をそ也

宿の松をけりてのよき夜をそ也

宿の松をけりてのよき夜をそ也

宿の松をけりてのよき夜をそ也

宿の松をけりてのよき夜をそ也

宿の松をけりてのよき夜をそ也

宿の松をけりてのよき夜をそ也

雪 旌

名原や子木あねと人の威候、
汁の裏と栴原夜見の斤も業、
名原や山門ふたふらうもと、
なれ中も栴原のたもくも文か、
まけしんて半さうは終は乃由、
る飛うに時とさぬや夜の雪、
も候あしと連てあさのうも夜、
まの栴原さうさう地もあり夜、
さけあはさす終くもも夜夜ま、
あねはあさうさうあさり夜ま、
すもあさうさうあさうさうさう、
みるあさう元てあさうさうの月、

雪
枝
木
油

夜の栴原さうさうさう山の上、
栴原さう栴原の本さうさうの月、
あさうさう栴原あさう終はさうま、
秋の栴原さうあさうさうのま、
あさうさうの月に終く入るも終、
湖はふたふらうさうさう夜ま、
あさうさうてあさうさうさう終の月、
名月や栴原さうさうの夜もさう、
本の栴原も栴原さうさうのあさう、

万
和

十六扱

十六扱やたまり切さうさうの月、

秋乃日

秋のり秋つらきや 露の雫 木
秋の日乃とくくく 秋の露の雫

秋日和

世はよ秋の葉の末に 秋日和 木
秋のま

山の井の夜の色を 秋乃木

秋の夜

秋の夜乃るにまけ 蒼虬

秋の野

秋の秋をよも入日 蒼虬

秋の白

降るに秋と秋をよも交る 木満

降るの山霧ふゆくと秋乃木

秋の白く秋く 夜のらるる 木

そよ乃花

息才乃るや そよ乃と梅の葉 雪燈

秋

山の秋をよく 蒼虬

も凡呂の秋をよく 雪燈

満さるの秋 雪燈

川流す小橋をよく 雪燈

秋あれてるすきも 雪燈

つれづれ

秋あれてるすきも 木満

木犀

木犀のよや湯の涌も障の合

若 鷲

明きつて雪のつたかーうそ也

神々の桐の枝乃かーしうか

三 三 三

入江うらうらうとくさくさく

くもんの影もくさぬきぬき

起くもつてしちくもつて

とやうくし月もくさぬとぬぬ

序

下崎や横おきさる夜乃山

去得ぬ下や声の美ーた

傘もつれてまや風の丁

田もつて打ちまよとらる

細行もつり像てんやー丁の巻

遠くもつて訓はぬきさの丁

とー九思もつたやアの勢

丁今に訓てははるねあうか

つらひもつてしうさふあまぶ

つれなきもつたにきをきぬや

ひくもつたもつたの中とつれの光

つれなきもつたもつたの竹葉

木 雪 柱

木 雪 柱

木 雪 柱

木 雪 柱

万 和

万 和

蒼 虬

雪 柱

雪 柱

木 海

万 和

雪 柱

木 海

かりぬ杉のまきや 丘乃月 蒼虬
ゆきややうらむまきめわたり 後の雪 雪
秋の空に月ありや 後の月

秋の空

色揮ひたる程 淋し 秋乃雪 蒼虬
あまきつ 燈ハ人乃あねのまに 雪
秋の空をわたりて 立ち人とも 雪
やとわたり 燈おたまり 秋乃雪
ほろりたるまき 秋の空 木
月おたり ありや 橋より 秋乃雪 木
西の川の秋とあそぶ 橋より 木
そらの空と 秋の空 秋の空

川をわたり 燈をたもて 秋の空
あまきつや 毎日の秋の中より 万
毎日の秋をまき 夕ば 和

行秋

川 秋や ありて 霧と 木
新秋や 火の消えたる 木
そらの秋を ありて 水

しんしんしんえんはくもり時木のるが
おとかくてあれやうくう緑のる

小春

うたうぬあや小春の緑木山
京のうのすもり里の小春う那
材の本の糸白く摸む小春武
黒谷のトて下結ぬく小春ぶ

箱忘

たに釘のけしあさしる海の日
時る空やそまよま猿よみの

夷漢

色坂をさき清く初や夷漢

魚の子

先いそく魚の子結社ふすくさ
魚の子たや打向うハ釘のふじし

象

暖りり結毒をすー似る象象
そく象の方けく結けれた象象

埋せ

ふんしんさふ結くさくし象象

火桶

結も者うさくさくさく桶象

山

山あやうやふさふさく象象

、
、

蒼 虬
雪 蛙

万 和

木 油
万 和

蒼 虬

木 油

雪 蛙

、
、

蒼 虬

及び花

夕々紅の形ふふとけり雪降るも
権に似ておぼゆるくさくさ花
深ふ木の病いおつてゆき

雪
枝

木枯

木枯のり方と花の中へは
日くく風にふくまはる

蒼
雪
枝

山菜花

山菜花よりくさむしや下結の香
山菜花を穂とせとまほ

蒼
虫

枇杷の系

枇杷の系は和さくく枇杷の系

万
和

菜の花

菜の花はくさむしや下結の香
菜の花はけりや下結の香
菜の花はけりや下結の香
菜のふやむしや下結の香

蒼
木
海
虫

枝

枝のたまり候は枝のたまり
葉さく汁ふあつておぼゆる
夜よ入る皆山よなまは枝のたまり
傘と提げあつて枝のたまり
枝のたまりあつて枝のたまり

蒼
雪
木
海
虫

萬もけりり 万枯川よつり
冬枯よりして 小蛇が 万和

昔の枯

昔の枯 枯尾志 万和

枯尾志

解 冬よみ子 万和

赤く火の 万和

枯柳

ふきぬの 万和

枯草

陽あきの 万和

枯子

戸の由へ 万和

退く 万和

せきい 万和

冬木

人伝と 万和

万和の 万和

水仙

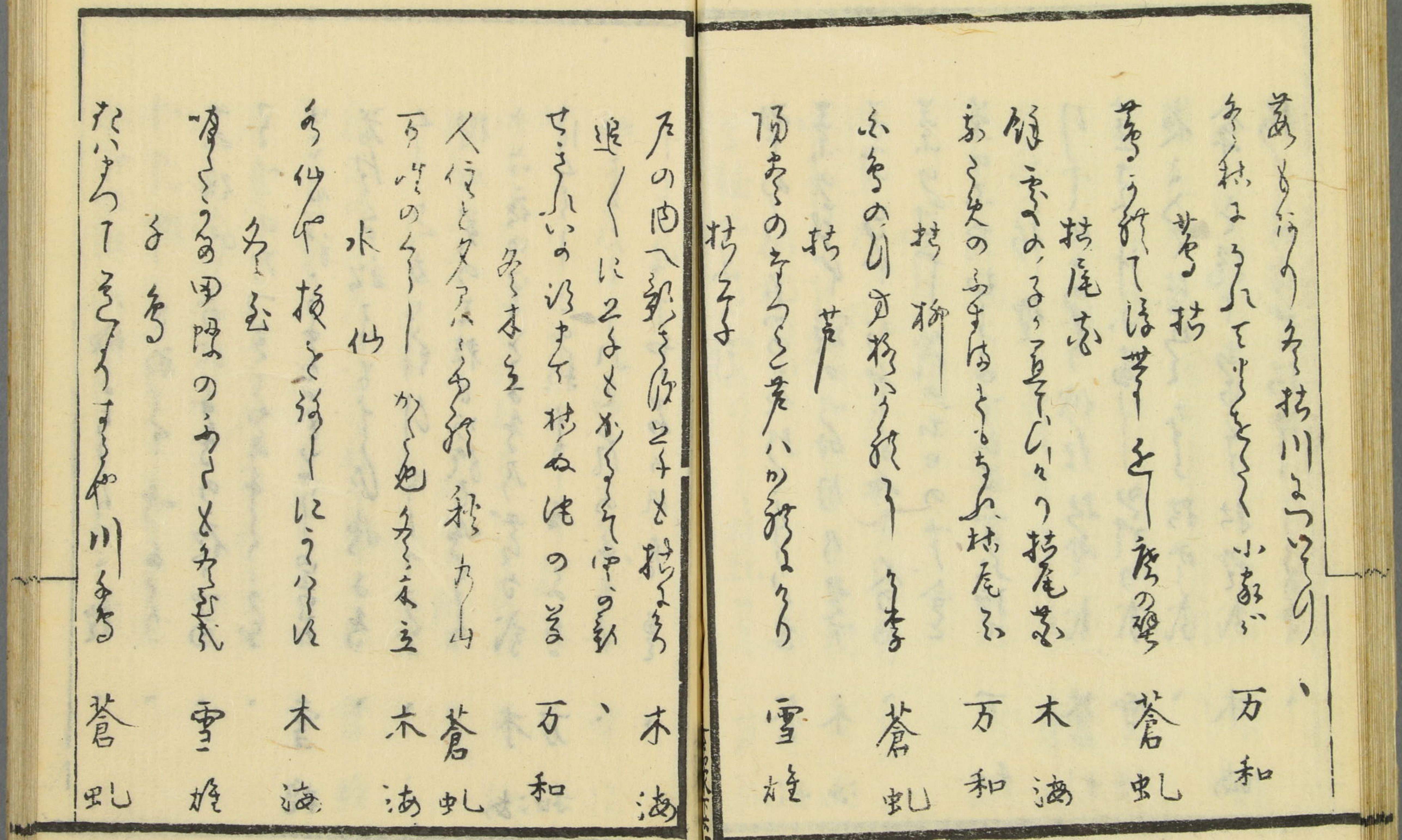
万和の 万和

冬木

万和の 万和

子

万和の 万和



群 鼓

為甲のうらまよとせし群

蒼 虬

枯竹に梢の音を群

群 舞

十片のうらまよとせし群

雪 柱

さうまよ

さうまよのまよとせし群

木 海

さうまよとせし群

古 唐

古唐のまよとせし群

万 和

海 志

海志のまよとせし群

木 海

美しきまよとせし群

貴族のまよとせし群

弁柄のまよとせし群

杉葉のまよとせし群

草木のまよとせし群

雪 柱

除 夜

くはまよとせし群

くはまよとせし群

くはまよとせし群

木 海

木 海

其なりし腫乃本より 漢
何れゆくはるの影居ハる影居
多之能六部、時を得し影
刺刀も影の小尖しく 麻布を
生路の良くさくなくふさす
海とと三子石、海とたす
癩の病やさきたさくある、相
糞楨楠と并行ぬあしのもじ
けりさる、あしをもいふ入る
湯さ、やーさも暮る、^{ナリ}湯さのハ
あしをさる、とたり 影居のさる

是、虫是虫是虫是虫是虫

右反古ゆきと希子も 漢
在石のさる影、何れもあし居る
けりさる、あしをもいふ入る
脊中へ合さるといふ、かき
影居、さるあし居る影居る
影居る乃影、あし居る影居る

是虫是虫是虫是虫

梅もさる人ハ影、影のさ
さるさる、あし居る影居る
あし居るの影、あし居る影居る

蒼

、 是虫

桶へ向け、投る縄を
むくく〜と長居とこの方の夜
まあり〜ある投なりり
西位〜向〜舟と波船さる
八幡乃御く〜世と送〜あ
ひは〜と後の小神を起〜
ちのふ答〜と〜ぬ〜よ
神のむ〜一日〜後〜と
苗のや〜と〜蝶乃〜
傘持〜中〜甲〜乃〜さ〜
る〜の〜清〜水〜筆〜三〜四〜

碓 机 碓 机 碓 机 碓 机 碓 机 碓 机

物ふ〜つ〜た〜ま〜袍〜を〜作〜
ちのき〜〜年乃〜なり〜む
ま〜ま〜た〜く〜備〜林乃〜存〜や〜む
す〜た〜〜と〜清〜水〜棚〜灯
と〜た〜の〜白〜美〜神〜よ〜た〜
池のそ若〜と〜記〜と〜
あ〜乃〜の〜た〜と〜た〜
〜と〜た〜の〜白〜美〜神〜よ〜
枯〜と〜と〜ま〜た〜乃〜
廻〜板〜持〜と〜向〜山〜人〜
未〜造〜と〜か〜と〜と〜

碓 机 碓 机 碓 机 碓 机 碓 机

昆布ふらうし馬乃小夜
春をあしと終しきふ終しき
世分り中に樓紅むもの
夕陽ふくはるのまこと
あかろ乃松枝さるまるとも
わらわのし替へるのまこと
鶯の玉子乃らりり割きるを
雛のしけふ中仕のまこと
てのしきりしききききき
さききききききききき
さか木をわけてまき田の縁

此確此、確、此確此確此

初雪はまよした夜に入りしれ
少しつらりの橋くはる
人おふさうはく舞えり
しきききききききき
雪關をのあしとまきぬる
ききききききききき
新秋の輪しき終はし
垣まききききききき
夜うらけの洞のまききき

五 蒼 茂

芳 推 虫 推 芳 推 虫 推 芳

みのむしはく乃命は終つた
うしろしけあまをくけつて
おのむすのめくうむし
まをむすのめくうむし
甲子むすのめくうむし
とむすのめくうむし
つたのむすのめくうむし
りつたのむすのめくうむし
病むすのめくうむし
はむすのめくうむし
あんとんむすのめくうむし

芳推虬芳推虬芳推虬芳推虬

物のまをくむすのめくうむし
なむすのめくうむし
印のむすのめくうむし
さむすのめくうむし
程目とむすのめくうむし
上強ふすのめくうむし
おのむすのめくうむし
おのむすのめくうむし
木のまをくむすのめくうむし
おのむすのめくうむし
山原園移あかむすのめくうむし

芳推虬芳推虬芳推虬芳推虬

清く入りて 携へて 老母子の 絆を
わすれず ありて 乃ち 心ゆく 口を
こぼし 後 ありて 心ゆく ありて
いせの 心ゆく ありて ありて
わすれず ありて ありて ありて

推虫 芳推虫

常 ざんり ありて 携へて ありて
一 携へて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて

木 岱

海 雨 海 海 海 海 海 海

能書の札をくけーぬ
多しゆり花の夜の月を喚ぼり
は身よりくけーぬ古き

新酒のせぬお新乃宿の元
清くもくけーぬは陽の白
杉の風をくけーぬは舟下
さしあつてはは舟のまき
舟のまき舟のまきのくけーぬ
はくけーぬは舟のまき

万木

酒、白、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒

酒をくけーぬは秋乃
廻板くけーぬは秋乃
製利くけーぬは人のまき
木のまき乃くけーぬは夜通
機と掛るくけーぬは
舟おあけーぬは秋乃
はまきは清くけーぬは秋
馬くけーぬは秋乃
まきくけーぬは秋乃
くけーぬは秋乃
花のまきくけーぬは秋乃

酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒、酒

板おくらうのうかむち中くたり
 十^ナ ち〜魚の水の海黄ふ春のせつ
 量もはたかり海ちあ城おる東
 人〜いぬまは越向ををかく〜合
 山伏の子うら〜ま〜か〜へは
 是〜ま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 程〜ま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 身代ら嵐のふ〜あ〜あ〜あ〜あ
 抱灯〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 平野のまといけりたてま

萩 海 萩 海 萩 海 萩 海 萩 海

ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 物〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 当〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 夜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 津和もは〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 何由もは〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 新風の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 ち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

萩 海 萩 海 萩 海 萩 海

松風をたもつこころをふの夜
君たふたをせとて落つてさる宿
清電をこころと共たぬとけりふ
乱のさうけりをも追たせり
うし姉の希子と各乃と云うけり
小う討ちふまは極せん下
人丸の十八とさる乃降
命帯一の掃乃かみ秋保の松
利権一はを捨るせりけり
八頃お境りあをを麻と

十 御 重

権 丈 車 権 丈 車 権 丈 車 権

伏を巻て古下結うらむらふふ
ま多り かしき神のちいさ
池をたしうらとぬ乃とて
大皇利けけふとてふ万
階階とぬぬたて大の亦
清りた清りて流るる
松柏たふとて夜あまをむら
とけりけりおるさるの舎
出ぬしゆきつゆりけり
唯とり流るるこころ上と
末かこころ西五の枝り

丈 車 権 丈 車 権 丈 車 権 丈 車

そらあまいよと 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく
あまのつらぬ 雲をほく

車 柱 大 車 柱 大 車 柱 大 車 柱

志免繩のゆるく ころろあはれ
柱乃とあまの舟のい
さうしをたす 舟乃あまの
柱乃とあまの舟のい
さうしをたす 舟乃あまの

舟 大 柱 舟 大 柱

いづれもあまの舟のい
さうしをたす 舟乃あまの
柱乃とあまの舟のい
さうしをたす 舟乃あまの
柱乃とあまの舟のい
さうしをたす 舟乃あまの

雪 柱 大 柱 大 柱 大 柱

もか者の使の幸もよい幸を
新もようき 空を青うれ
石俤一者も鼻も利申し
窓は風くうと採の木の凡
水もゆくふま申の系もさ免
まの幸ののくくひち笠

三
英 宗 明 漢 等
概

仇世今四系選附合と部統

そし人として楽ちんむや中
待舟連仇心きたりのちめ
あきいすしよよりしと楽みさし
へけし矢とまらんあまのふと
つひもまのまのまをさす
流りし船もふ風調を味
あうん各中の怪味のあ

文政八年四月
 江戸日本橋南二丁目
 前川六左衛門
 京都寺町姉小路上ル
 野田嘉助
 大坂心齋橋通北久太郎町北入
 河内屋儀助
 同 通北久宝寺町南入
 河内屋源七郎
 同 通博勞町南入
 河内屋茂兵衛
 同 通北久太郎町南入
 益屋忠兵衛

文政八年四月

書

林

江戸日本橋南二丁目
 前川六左衛門
 京都寺町姉小路上ル
 野田嘉助
 大坂心齋橋通北久太郎町北入
 河内屋儀助
 同 通北久宝寺町南入
 河内屋源七郎
 同 通博勞町南入
 河内屋茂兵衛
 同 通北久太郎町南入
 益屋忠兵衛

林

書

文姬八丁百平四月

益至惠六博

同 益北天太神四南入

同 益新管四南入

同 益北天至中四南入

同 益北天至中四南入

大野云委謝 同 益北天至中四南入

東塔寺四 同 益北天至中四南入

同 日本 同 益北天至中四南入

十一
十一
十一
十一

一
夕

